

# 何故、絶対非武装なのか？

## (その2)

——「日本に自衛力は必要ではないのか？」という問いに答えて——

意見広告運動の事務局スタッフのSさんからの問題提起にこたえた前号の特集は、好評で、ぜひ継続してほしいという希望が多数寄せられました。前号に続いて、「自衛隊はなぜいらぬのか」への何人かの方の回答をお送りします。なお、石田雄さん、佐橋弥生さんと加藤敦美さんの意見は、前号をご覧になってすぐお送りくださった投稿です。(編集部)

### 【お答え・その4】

#### 戦争の未来に子どもは送れない

石坂 啓

15歳になる息子がいる。

いつ「反抗期」になるのかなーと用心してつきあってきたけれど、案外親と仲良くやっている。私は自分が中高生の頃は親とほとんど口をきかずに過ごしていたので、素直な息子が何だか「お子ちゃま」に思えて不思議だ。しかしうちは私も夫もルーズだし勝手にやってるし、ひとつも子どもにエバったり命令したりをしていないから、子どもも反撥のしようがないのかもしれない。

だから週末は三人で食卓を囲みながら同じ映画やドラマを一緒に見ている。くだらないギャグにゲラゲラ笑ったりムカつくニュースにブンブン怒ったり、温泉に行きたいなーと言いながら旅番組を見たりしている。

#### ▼二十代だったら子どもは産まない

平凡な生活だ。平凡で平和な日常だ。子どもが健康に育ってくれたことに感謝しているし、子どもと楽しく過ごしてきたことにも感謝している。子どもを産んで後悔したことは一度もない。しかしもし自分がいま二十代だったら、これか

らどう選択するかという段階だったとしたら、おそらく私は子どもを産まなかったと思う。

息子が選挙権を持つようになる前に、この国は憲法をかえるだろう。「アメリカの押し付け憲法だから」とか「戦後何十年もたつて国際情勢に見合わないから」とか「環境権を盛り込まなくては」とかいろんなことを言っているけど、要は一点。この国が、正規の軍隊を持つ国になる、ということだ。

それがどういう意味をもたらすのか、どれほど恐ろしいことなのか、なぜみんなは平気であるのだろうか。よく世の中の母親たちは怖くないかと、信じられない気もちでいる。私はものすごく怖い。いつでも戦争ができる未来に、子どもたちを送ることになるのだ。

#### ▼殺す・殺されるを他人に頼めるか？

どこかの誰かが専門の兵隊になってくれて、私たちの見えないところで敵を殺してくれたり私たちを守るために殺されてくれたりするのだろうか。アメリカが大変だというのならプロフェッショナルな兵隊がただちにかけて、アメリカ人の楯になって先に弾に当たってやったり「テロリスト」に首をはねられたりしてやるのだろうか。私たちは喜んで金を払い、もっと武装を強化させて、効率よ

く人を殺し人にダメージを与える武器をたくさん作らせるのだろうか。

人を殺す役割りを「自衛軍」、つまり今の自衛隊員にやらせることになり、死んでもらう役割りもいまの自衛隊員に任せることになる。自衛隊員はそれでいいのだろうか。人数はそれだけで足りるのか。足りなくなったらどうするのか。

### ▼軟弱な若者をピシバシと鍛える？

一方で死んでくれている人がいるときに、他のみんなが「平和っていいよねー」とポンヤリ過ごしているわけにはいかなくなる。そんなことでどうする！と若者に喝を入れたくなる大人が出てくる。そりゃそうだ。死者の手前とりあえず我々は厳粛に事態を受け止めるし、犠牲者を讃えることをする。軍隊を、兵隊を支持し、感謝することを強いられる。もう批判などできない。子どもたちにもそう教える。国のあり方を。国の方針を。真摯に受けとめて、私たちが何かしなくてはと考えさせるようにする。教育の一環にそれを取り入れる。日の丸の前で誓わせる。全員が直接的な兵力になれるわけではない。しかし少なくとも精神的にはそうであってもらわないと困る。自由だの権利だの国民がネボけたことを言っているようでは、一丸となって戦争に向かうことなどできない。体力がなくて甘ったれ

た若者ばかりじゃ役に立たない。奉仕活動を義務づけて、社会的な義務と責任を自覚させる。すぐに徴兵制を持ち出す必要はない。それは次の憲法改正のときでいい。何しろ次回は国会議員の半数の支持だけでいいのだ。「国民ハ兵役ノ義務ヲ有ス」……兵役というのがダサイのなら、

「国際貢献ノ義務ヲ有ス」としてもいい。

自衛隊が自衛軍と名前をかえたときに、これまでと同じように志願者が続くだろうか。いくらなんでもホントに戦争するのはなーと、希望者が少し減るかもしれない。いまの若者は軟弱だから、スパルタ式にピシバシやつたらすぐに脱落しちゃうだろう。厳しく喝を入れるだけではなく、甘やかしたりおいしい話をしたりして、軟弱な若者でも取り込めるように、最初は間口を広げる努力をしてくるかもしれない。

兵役についての者は優先的に東大合格。

兵役についている者には高収入保証。

軍隊がいかにカッコいいか、いかに魅力的かを宣伝する。犠牲的精神でカッコよく死んでいく主人公の物語を流行らせ、映画化しドラマ化しマンガ化する。女ノコとチャラチャラデートしたりセックスしたりすることは愛国心のカケラもないことで、許されない。渋谷でナンパしている男女やコンビニの前でしゃがんでいる

男女はソッコリ逮捕で、鍛えなおす。軍隊に入ってピシッとして背筋を伸ばして敬語を使う若者は、やはり大人から見ても好ましい頼もしい。死ぬことが怖くなくなる若者がどんどん増えてくれることを、みんなが望むようになる。

### ▼武力は要らぬが覚悟は必要

いっちゃあ何だがうちの息子は軟弱だ。運動神経がベラボーによかったり逃げ足が速かったりすればまだしもだが、たぶんトロトロしている方だ。拾ってきた子猫に死なれて大泣きをする。人に殴られたこととおそらくない。人を殴ろうと思ったことも、たぶんないだろう。

これまで私は「憲法」について子どもに胸を張って言うことができた。「この国は戦争をしない。平和憲法を持っている。これは世界中の人たちがうらやましいと思う、世界に誇れる、立派な憲法である」と。

だから今さら言いなおすことなどできない。「悪いけど憲法かえちやうので、今後は戦争をする国になっちゃいます。あととはよろしく」……だってホントに「あととはよろしく」だ。軍隊となる自衛隊にこれから入ることになるのは、私ではない。彼ら世代の人間だ。

夫と息子と三人でテレビを見ながら、私はもう一品つくろうかなアと考える。

冷蔵庫をあけると猫がニャーと寄ってくる。猫にちくわをやりながら、鍋を火にかける。部屋はあたたかいテレビは愉快だ。

戦争はしたくないが、そのための戦いはおそらく必要になってくる。武力は必要ではないが覚悟は必要だ。時間は限られているし、たぶん短い。間に合わないとは考えたくないが、勝算は薄い。でも目の前に子どもがいる。

戦争をする未来に、送るわけにはいかない。そのために産んだわけではない。

(いしざか・けい、漫画家、本会会員)

### 【お答え・その5】 軍隊は民間人を犠牲にする

石田 雄

93号では「国を守るために自衛隊はなくてはならない」という意見にどう対応するかが問題となっていた。私は、軍隊は民間人を守るのではなく、逆に危うくする存在だということを、軍隊生活を経験したものとして強調しておきたい。

愛国青年として「学徒出陣」に応じた私は、軍隊がおよそ道理が通らない暴力による権威主義的組織だということを発見した。何か説明しようとするれば、「理屈を言うな」といって殴られる。要するに無理な命令にでも従う人間になるように

身体で覚えさせるというやり方だった。そのときに身体に覚えこまされた習慣のおかげで、今でも「天皇」という声があると急いでテレビを消す。それは「天皇陛下」という声を聞いたときは直ちに直立不動の姿勢をとらないと殴り倒された体験が身体にしみ込んでいるため、血圧が上がるからである。

人を殺すことを平気でやれるような人間を作りあげるために軍隊では理屈を考えない絶対服従の秩序が求められた。そしてこのような内部秩序に支えられた軍隊は、国防が第一の国家目的であるという名目で、民間人に対しても軍隊に服従することを強制した。

そのような軍隊は果たして国民を守ってくれたか。答は反対である。精鋭といわれた関東軍は、民間人を盾として置き去りにし、鉄道を使って逃げてしまった。その結果、多くの残留孤児を生んだ。沖縄ではスパイ容疑で民間人が殺されたり、集団死を強制されたりした。実際、軍隊で将校にまでなっていた私でも、敗戦で軍隊が解体されたとき、これで恐ろしい憲兵もいなくなり職業軍人による支配も終わるとほっとした記憶がある。

ただ、野間宏の『真空地帯』にみごとに描かれた軍隊秩序は、戦前の日本のような軍国主義に特殊なもので、民主国家では違うのではないかと、私もしばらく

の間は考えていた。しかしヴェトナム反戦運動をやる中で、アメリカの軍隊も殺人のための職業的集団として同じような特徴を持つていることを発見した。私の家の近くでも、米軍帰休兵が泊まっているホテルの三階から精神に異常を起した兵隊が机を外に放り出すという事故も起こった。実際に彼らに会ってみると、いっどこから弾丸がとんでくるか分からないから、とにかく誰でも殺すのだと言っていた。殺人効率を第一にする軍隊という集団では、人間性を否定して破壊をする習性を身につけなければならない。民間人の生命や安全を考えている余地はない。

お国を守るといっていた軍隊でさえもこの状態である。まして「地球的規模の同盟」といわれる米国に従属した軍隊が、日本の民間人のことを配慮するとは思えない。民主国家ではそのようなことはありえないという人がいるかもしれない。しかし、日本でも大正デモクラシーの時代には軍人は制服を着て外出することを躊躇していたほどだったのに、僅か十年ほどの間に排外的愛国心によって「国防国家」の必要性が強調され、重要な情報は軍事機密の名によって国民に知らされず、軍国主義体制がつくられていったのだ。軍隊が国民を守るといふ幻想は捨てなければならぬ。

では何で市民の安全を守るのか。それは非暴力直接行動による抵抗によってある。そのことを私は一九六八年の『平和の政治学』(岩波新書)で強調したのだが、ガンディやキングの死が遠い昔になった今日、あまり注目されなくなっている。もう一度ぜひ考えなおしてほしい。

(いしだ・たけし、東京大学名誉教授、政治学、本会会員)

### 【お答え・その6】

武力を保持したままで  
戦争を放棄することは出来ない

——九条本文を読み直す——

高橋 武智

「自衛隊はなぜいらぬのか?」という「市民意見広告運動」事務局のSさんの問題提起と、編集部による論争の勧めと、三名の方の回答(いずれも本紙前号に掲載)とを読み返し、なるべく論点が重ならないような心がけながら、ぼくなりの回答を綴ってみよう。

### ▼非現実的仮定を前提にはならぬ

まず、Sさんが紹介している意見広告運動に寄せられた電話の内容をおさらいしてみると、「(自衛隊はいらぬなんて)ミサイルが飛んできたとき(私たちを見殺

しにする気か)」「(意見1)、「敵が攻めてきたとき(自衛隊がなければ、みんな殺された)り、ひどい目に逢う)」「(意見4)のように、「(了したとき)」という仮定の問題を、まるで既定の事態のように前提にしていることが特徴的だが、これについては、東北アジアの現状では、ありそうもない非現実的な仮定だということを本野義雄さんが十分に反論していると思う。

少し補足すれば、確かに日本では北朝鮮を仮想敵国視する見方が強いが、北朝鮮は米国のあいだで、50〜53年の朝鮮戦争以降今なお「停戦状態」にあり、したがって、米国に対し厳しい態度をとっていることは事実として、日本に対しては、最大限言って、植民地として支配された過去の歴史に照らし警戒感をもっている程度でしかないのではないかと。むしろ、植民地支配の過去を反省しないどころか、拉致問題を理由に経済制裁を声高に主張することこそ、二国間関係を緊張させるものだろう。北朝鮮と韓国とのあいだも停戦状態がづづいてはいるはずだが、両国のあいだの関係は著しく良好になっている。以上の四カ国に中口を加え、六カ国協議が現に進行中である。最悪の交渉であつても、最善の戦争よりはるかにまさる、という立場に私たちは立ちたい。

また最近、野党の一部にまで「中国脅威論」が声高に語られていることも憂

慮に堪えない。「東アジア共同体」構想といったいどう折り合いをつけるのだろうか。

「私は原爆で姉をなくした。自衛隊がいなくて誰が私たちを守ってくれるのか」(意見2)にいたっては、45年の原爆投下当時、日本国内にも曲がりなりに陸海軍があつたことを思い出してもらいさえすれば十分で、そもそも質問として成り立たないことは明らかだろう。疑問が残るなら、前号の本野さんと諸橋泰樹さんの「お答え」を読み直してもらいたい。

最後の「戦争は反対だが、国を守るために、自衛隊はなくてはならないのだ」(意見3)は、以上四つの意見をSさんが要約した「九条は守らなければいけないけれど、自衛隊は必要だと思う」(総括的意見)とともに、この秋になって自民党がまとめた改憲案と限りなく似ていることに注意をしよう。念のため言えば、自民党案は、章名を「戦争の放棄」から「安全保障」と改めたうえで、九条第一項の「戦争の放棄」を残しつつ、第二項では、自衛隊どころでない「自衛軍の設置」を規定しようとしている。

Sさんが紹介しているこれらの意見は、昨年「九条実現」の意見広告が出たあと寄せられたものだそうだが、当時は自民党の改憲案はなかった。しかし、「九条実現」に疑問を呈する意見が実は自民党の

考えに近い、つまり「九条の骨抜き」あるいは「否定」に実質的に組みするものだということは、上の簡単な指摘からも明白ではないだろうか。以下、「なぜ、絶対非武装でなければならぬか」「なぜ、自衛隊はいらないか」が「九条実現」と切っても切れない関係にあることを説いていこう。

### ▼九条の構造を正確にとらえよう

まず、「九条は守らなければいけないけれど」などと、まるでお題目のように簡単に言っただけはほしくない。九条をしっかりと読み返してみてもらいたい。すると、第一項で、

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」

と、戦争を国家の独占的行為であるとすると、普通の国家のあり方を高らかに否定した上で、つづく第二項で、

「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

と、さらに厳密に枠をはめていることに注意しよう。

第一項だけでは、理念ないしその宣言と受け取られかねないが、つづく二項が、

これに手段と根拠を与える構造になっているのだ。戦争を放棄するだけではまだ足りない。戦力を放棄してこそ、戦争の放棄に内実がそなわる、と駄目押ししている。私たちが「九条実現」と言うとき、いうまでもなく、この双方を含めて九条と言っているはずだ。世界に二つとない新しい国家のあり方をあえて選んだことを世界に誇っているはずだ。(第二項の「前項の目的を達するため」をめぐり、学者のあいだには、「自衛権を正当化するもの」というようなややこしい議論があるが、私たちは法律には素人だからこそ、瑣末な議論にとらわれず、ありのまま素直に読んでいきたい。)

このように九条をトータルに考えれば、それは「戦争の否定」と「完全非武装」の二面を含み込むことによって自足的な条文となっていることが分かる。九条の画期的な規定は、第二次大戦直後における連合国の要請でもあったし、十五年戦争の体験を踏まえた日本人自身の選択でもあったが、何よりもまず、日本の侵略戦争のため、1千万をこえる犠牲者を出したアジア諸国民衆の悲願の達成でもあったことをいくら強調してもしすぎることはないだろう。(かつて、蘆溝橋の抗日戦争記念館の展示の最後に九条が特筆大書されているのを見て、アジアの人びとの気持ちに反映しているという意味で、彼らから日本人に贈られた最良の贈り物だという趣旨のこ

とを本紙に書いた記憶がある。同じ記念館を訪れた小泉首相は何を見てきたのか。)

### ▼戦争放棄とは完全非武装以外にない

50年夏、朝鮮戦争勃発直後にマッカーサー占領軍総司令官の首相宛て書簡により、7万5千名の「警察予備隊」——今日の自衛隊の前身——が設置されてから現在まで、九条は片肺飛行を始めることになったが、この数字が米国が日本から朝鮮半島に派遣した兵員、4個師団の穴を埋めるものだったことは示唆的である。

占領下だったからやむをえなかったという議論も成り立つだろうが、独立後も私たちはこの片面性と空洞化を放置し、九条の完全実現のための努力が足りなかった。ここ数年、とりわけ小泉首相のもとで、自衛隊はアフガン戦争支援を展開し、イラク戦争にはサマウワに自衛隊を派遣して、米国軍との緊密な関係を強めている。最近の米軍再編の動きは「日米軍事同盟の緊密化」と露骨に表現されるまでに、どうこじつけても憲法上許されない軍事行動や集団自衛権の領域にまではつきり踏み込んでいる(「米軍再編」については、ピースニュースのホームページ、<http://www.jca.apc.org/p-news/>に丁寧な解説がある)。この数日、「占領された島を奪還する」ための日米共同軍事演習の様子がしきりに報道されているが、

「他国の島を侵略する」作戦といったところが違うのか。対米英の宣戦詔書（41年）も、開戦の理由を「自存自衛のため」と述べていたが、古来戦争は自衛の名のもとに始められてきた事実を何度復習すればいいのだろうか。

例の9・11のテロに対する報復として、米国が展開した「反テロ戦争」がそのままアフガンへの戦争となったところにも、「国家だけが行使しうる戦争」の論理は冷徹に貫徹している。その後イラク戦争を始めた米国の政策は世界的に一層不人氣となったが、その米軍にこれほど密着している自衛隊の姿は、九条への最もあらゆるさまざまな違反行為でなくて何であろう。今や自衛隊は米軍の補助部隊、改憲案の表現を借りれば「米国防衛軍」となったと言わざるをえない。九条実現を求める日本市民に対する露骨な挑戦であるとともに、周辺アジア諸国に新たな不安をかき立てることは必至であろう。

もう一度言うなら、武力や軍隊を絶対にもたない完全非武装主義を除いて、戦争の放棄を貫くことはできない。「剣によつて立つ者は剣によつて滅ぶ」という古い言い回しがあるが、武力や軍隊は、予防戦争や「自衛戦争」や一般に戦争を始める口実や理由にこそなれ、戦争の廃絶につながることはないであろう。19

50年以來の長い宿題ながら、自衛隊の縮小・解消に向けて努力を始めなければならぬまい。それなしに九条実現を徹底させることはできないであろう。

(06・1・16)  
(たかはし・たけとも、翻訳家)

【お答え・その7】  
自衛隊なんていらぬよ

佐橋 弥生

九条守り、実現させよう！

戦争をなくし、平和な世界をつくらう！

この同じ思いを持つ人たちの中に「日本を守るため、自衛隊は必要だ！」と、当然のように思う人が多くいる。

なぜ、武器を持つ自衛隊Ⅱ軍隊があつて、平和な世界になると思うのでしょうか。地球上から、軍隊、武器、すべてがなくなつたとき、初めて平和な地球になるのです。

日本を「守る」とは、敵を想定していることばです。

敵などいません。金もうけのために、戦争させたい人たちが、「敵」を捏造（ねつぞう）しているだけです。小泉首相が靖国参拝を続けているのも、敵をつくり、自衛軍が必要だと、人びとに思いこませるためだと、私は思います。

敵を想定することがまちがいのなのです。敵をつくらぬようにすればよいのです。どの国も、他国との文化のちがいが、考え方のちがいを理解し、認める。その上で、問題がおきたら、粘り強く、話し合いで解決する。そして、非武装・不戦を誓う憲法九条を、外交と、ひとりひとりの力で、世界中に広めてゆく。

しかし、武器を持つ自衛隊がある限り、他国から、あの国は襲ってくるかもしれない、つまり、「敵」だと思われて当然なのです。

自衛隊を救援隊とし、武器を援助物資に変え、過去に犠牲を強いた国の人びとの手助けをすることで、「敵」が友好国に変わるのです。

平和憲法を持つ日本こそが、平和へのはじめの一步を踏み出せるのではないのでしょうか。

(さはし・やよい、本会会員)

【お答え・その8】  
自衛隊がいらぬ理由

加藤 敦美

憲法九条は、次の戦争が世の終わりだという未来を示している戦慄的な預言です。

日本が戦争したら日本が消滅するとい

う、国民の集合的無意識の予感があるのです。そして、それは、日本が戦争すれば世界の終わりをひき起こすものとなるという、国民全体の洞察的直感なのでもあつて、これを裏返したものが、小泉ヒトラー圧倒的支持として現れた、崩壊それを「改革」と称している。退却を転進と称す、敗戦を終戦と称したのと同じ「大本営式語法」ですを戦争に視覚化する（戦前の日本と同じパターン）無意識的な恐怖にそのかされた、今に日本が襲われるという被害妄想（実は、加害者であるおのれを知っているゆえの自己恐怖です）をもとにしたナシヨナリズム、国を守れ、国民を守れという狂わんばかりの「虚勢を張った好戦的身構え」なのですから、これにいくら理詰めの説得をしても無駄でしょう。

憲法九条は、神が日本を赦し、救う意思を示されたものとして受け取るべきであつて、ここに、世界を終末的壊滅から救う道を与えられているのだと解するのが正しいのです。もちろん、それは世界最終戦争・全破壊に向かうアメリカの手足をしばる力をも含んでいます。日米安保体制は、逆説的に、憲法九条によつてアメリカの世界破壊の行動を制止する手かせ、足かせでさえ、あります。そこで、どうして、どこかが攻めてくるといふ被害妄想が生じたのか、です。

日本は一九四五年以来、アメリカの占領下にあります。もうとうに侵略され終わっているのです。世界一の核ミサイル国に侵略されてしまっているのだから、ミサイルへの恐怖心は、常に日本人の心の深部で再生されつづけながら膨らんで来ています。日本が核攻撃をうけたらどうしよう、という潜在的恐怖も、同じ根から出ています。日本を核攻撃したアメリカに侵略されているのだから、恐怖は日常的に日本人に食いこんでいます。

日常的にアメリカ軍に侵略されているのが当たり前になつているので、アメリカ軍がいなくなるのが「国を守ること」にならないという恐怖、つまり「国を守る」ためには、強大な国に占領してもらい、侵略してもらつていなければならぬ、そうでないと守れない、という「被侵略願望」が、いつもいつも日本人を捉えています。そして、アメリカ（他の強大国でもいいけれど）を日本に近づかすために（アメリカによる日本の恒久的基地化をダレスに懇願したのがヒロヒトだったのですからね……）ために、自衛隊が必要だ、——自衛隊はアメリカに居てもらつたための人身御供ひとみこくうみたいなもや、綱の役をしている、という精神病理が、「愛国心」と呼ばれて、売国を愛国と称する倒錯マゾヒズ

ムに日本人を縛りつづけている、ということ。そのアメリカより中国が強くなりそうだと感じる時、恐怖はパニック的被害妄想となつて、自衛隊を軍に、という合唱が湧き起こっているのです。正気にもどる方法はたった一つ、憲法九条を実現して自衛隊をなくし、日米安保をやめて、独立国なる非武装平和国家にすることだけ。これができないと、どうなるか？ はじめに記したとおり、すなわち世界の

終わりです。

今の時代の日本人にとつての「軍隊」は死神です。未来をなくした時に「軍隊」は、死への陶醉、誘惑的な死の象徴として、みんなを死の讃歌に酔わせ、滅びが美しい目的となるのです。前大戦の私たちは、まさにそうでした。だからこそ、憲法九条は生命の勝利としての未来を告げる神の言葉でした。今も、そして今こそ、それが人びとの愛と生命の讃歌として響くのです。

（かとう・あつみ、無職、77歳、本会会員）

